

カレッジインパクトに関する総合的調査研究

研究代表者 総合政策学部・教授 渡部律子

【概要】

本研究は、高等教育推進センターの前身である総合教育研究室が、1976年から継続的に実施してきたカレッジ・コミュニティ調査（以下 CCA 調査）を実施してきた指定研究プロジェクトから派生した調査研究である。これまで本プロジェクトは CCA 調査の継続項目をほぼ踏襲してきた。これまでの CCA 調査は、調査ごとに無作為抽出・無記名の調査を行ってきた。この CCA 調査は 30 年以上の学生の価値観や生活の変化を追うことができる貴重なデータである。しかし、この方法では個々の学生が在学期間にどのように変化（成長）していくのか、という疑問に答えることができない。これからの大学での教育や経験の効果検証のためにも個人の成長（変化）が把握できるような新しい調査の必要性は 2000 年頃から認識されていた。とくに、2008 年の 3 月には中央教育審議会大学分会の「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」が出されるなど、大学教育の質の保証に拘わる、「教育効果の検証」が大学教育改革における大きなテーマとなった。これらに 대응するため、2008 年度に研究チームをこれまでの各学部だいたい 1 人の 10 人程度から 20 人へと規模を拡大し、より多くの学部教員の意見をもとめ新しい調査の計画に入った。2008 年度に調査の方法と対象が検討された結果、これまでの CCA 調査を継続しつつ別の母集団として 2009 年春に入学する全学生を対象に入学時から 2 年終了時、4 年終了時、可能なら卒業後 3～5 年後についてパネル調査を行う計画を立てた。2009 年 4 月には第 1 回調査を実施した。第 1 回調査は、大学へ入学以前の経験、大学への期待、個人特性などについての学生の大学教育を受ける前の「事前情報」を収集している。詳細については「総合教育研究室年次活動報告 2009 年度」を参照されたい。

2010 年度は、2009 年度入学生が 2 年生を終わる時期（秋学期終了時；2011 年 1 月）を見計らって調査を実施した。調査の内容は、現在の生活や価値観、様々な活動への取り組みなどについてこれまでの CCA 調査の継続項目を踏襲しつつ、必要な変更を加えた調査票を作成した（詳しくは方法と表 1 を参照）。サンプリングについては、第 1 回調査で回答の得られた 3,430 名を対象とする事とした。また、2010 年度が第 16 回の CCA 調査（以下 CCA16）にあたるため、CCA16 サンプルから第 1 回調査の回答者を外すかどうか検討

された。その結果、CCA 調査の継続性を鑑みサンプリングが異ならないように、このカレッジインパクト調査とは独立に CCA 調査サンプルを抽出する事とした（詳しくは方法と図 1 を参照）。最終的に 2010 年度在学学生リストとマッチングできた 3,320 名を対象とし調査を実施し 965 票の回答を得た。回収率は 29.1%となった。

今回のパネル調査は、これまでの CCA で用いられた項目を踏襲することによって、入学前のそれぞれの個人の経験や価値観・期待、個人特性とこれら CCA 項目との関連を知る意味で大変特色のある調査といえる。

【方 法】

対象者：2009 年 4 月に実施された第 1 回調査へ回答された 3,430 名を対象とした。第 1 回に返却された調査票の内、学籍番号が無いものが 77 件、2010 年 7 月 26 日現在の在学学生名簿でマッチングできなかったデータが 33 件の計 110 件を除いた 3,320 人を調査対象とした。2010 年度は第 16 回 CCA 調査が 11 月に実施されていた。これについては、これまで通り抽出時の在学学生から 5 分の 1 で独立にサンプリングを行った。第 1 回調査回答者および今回のカレッジインパクトの調査対象者と CCA16 のサンプリングの重複を図 1 に示す。

調査表の構成：調査票の構成は属性をたずねるフェース部 8 項目、現在の生活や価値観をたずねる第 I 部 16 項目、大学の環境に対する認知をたずねる第 II 部 3 領域 60 項目からなる質問紙であった。これらはできるだけ現行の CCA 調査の項目（Q1～14 まで）を踏襲する事としたが、現行の項目について以下の変更・追加を加えた。

CCA16 からの変更点

Q3 諸活動の重視度（5 項目） → Q3 諸活動への関与度（18 項目）

設 問：「どれくらい重視していますか」 → 「どのように取り組んで来ましたか」

選択肢：（「非常に重視している」～「全然重視しない」5 件法＋「非該当」）

→（「とても積極的に取り組んだ」～「義務的に取り組んだ」4 件法＋非該当）

Q5 余暇の過ごし方 → Q5 生活時間

設 問：「誰」と「何」をしていますか → 以下の活動に 1 週間に何時間費やしたか

選択肢：「誰と」3 つから 1 つ選択、「何を」22 の中から 3 つ選択

→ 17 の活動についてそれぞれ費やした時間を選択（7 件（0～21 時間））

Q7 入学動機 → 入学時（第 1 回調査）に回答してもらっているので削除

Q9 心理的不適応 強制択一（はい、いいえ） → 4 件法へ

フェース部（追加）

F3. ナショナルリティ

「留学生あるいは外国籍ですか？」 はい いいえ 答えたくない

F4. 生年月

「あなたの生年月を教えてください」 19□□年 □月 （数字を記入）

新しく採用した項目

Q13. リアリティショック尺度：大学への入学前に持っていた大学への学業に対する考えや感じ方と入学後の経験とのギャップを測定する尺度。（半澤 2007 より）

Q14. 読み書きに関する経験：National Survey of Student Engagement (NSSE) 2010 より（5項目）「全くない(0)」～「20以上(4)」

- ①クラスで指定されて読んだ教科書や指定図書、本に相当する量の資料の冊数
- ②娯楽や教養のために読んだ本の冊数
- ③10枚以上のレポートを書いた経験
- ④5～10枚程度のレポートを書いた経験
- ⑤5枚以下のレポートを書いた経験

構成員との関係：NSSE2010を一部改変

「学内の以下の人々の関係についてあなたの感じている程度をお答え下さい」

それぞれの評価対を6段階で双対評価

本学の学生は、「親しみやすい－親しみにくい」「親切だ－冷たい」「仲間意識を感じる－疎外感を感じる」

本学の教員は、「話しかけやすい－話しかけにくい」「援助的である－無関心である」「思いやりのある－冷たい」

本学の職員は、「援助的である－無関心である」「配慮のある－配慮に欠ける」「柔軟に対応する－杓子定規である」

手続き：1月の本調査に先立って2010年12月末に対象者全員へ葉書による「調査の予告状」を郵送した。秋学期終了の2011年1月13日に1月31日を提出締め切りとして本調査票をメール便にて発送。メール便で宛先不明で返却された分で郵送で予告状が届いているものについては、適宜郵便で再送付した。回答者には随時「受領証」の葉書を郵送した。2月1日に提出期限を2月28日づけにした「督促状」の葉書を郵送した。「受領証」と「督

促状」には 2009 年 4 月の第 1 回調査の結果の PDF をアップした URL を提示した。当初の計画では、これらの結果のネット上への公開は調査票の発送時にあわせて行い、調査対象者へ前回の自由記述を含めた結果をフィードバックする事で調査の回答へのインセンティブを高める事が意図されたが、各部署との調整がつかず間に合わなかった。

3 月 16 日までで 962 票の返却があり最終回収率は 39.0%となった。これらの調査票の入力処理は (株) みずほ情報総研との業務委託契約のうえ入力・集計作業を委託した。

表1. 第2回2009年度入学生調査項目と第16回CCA調査項目との対照表

第16回CCA調査		第2回2009年度入学生調査	
F1	所属学部		学籍番号
F2	学年	F1.	所属学部
F3	性別	F2.	性別
F4	住居形態	F3. **	国籍
F5	通学所要時間	F4. **	生年月
F6	1月の平均支出額	F5.	住居形態
F7	クラブ・サークル活動への参加	F6.	通学所要時間
F7-2	A団体の種類	F7.	1月の平均支出額
	B団体の活動内容	F8.	クラブ・サークル活動への参加
	C参加度	F8-2.	A 団体の種類
	Dリーダーか?		B 団体の活動内容
F7-3	活動を通して養われる能力		C 参加度
	I 部		D リーダーか?
Q1	充実度	F8-3.	活動を通して養われる能力
Q2	登録講時数		I 部
Q2-1	出席講時数	Q1.	充実度
Q2-2	どのくらい出席するか	Q2.	登録講時数
Q3	諸活動の重要度	Q2-1.	出席講時数
Q4	親しい友人の数	Q3.*	諸活動への関与度(18)
	その友人との接触度	Q4.	親しい友人の数
Q5	余暇の過ごし方		その友人との接触度
Q6	重要な関係	Q5.*	生活時間(17)
Q7	大学進学 of 動機	Q6.	重要な関係
Q8	現在の進学動機	Q7.	現在の進学動機
Q9	心理的適応尺度	Q8. *	心理的適応尺度 4件法へ
Q10	教員との接触度	Q9.	教員との接触度
Q11	大学教育の有用性	Q10.	暮らし方
Q12	暮らし方	Q11.	情報収集の手段
Q13	情報収集の手段	Q12.	コミュニケーション手段
Q14	コミュニケーション手段	Q13. **	リアリティショック尺度(27)5件法
Q15	トピック項目	Q14. **	読み書き経験(5)
		Q15. **	構成員への印象度(9)
Q19		Q16.	大学教育の有用性(1)
	II 部		II 部
	CUES 60項目 3領域(実用性、学究性、共同性)		CUES 60項目3領域 3領域(実用性、学究性、共同性)

